子どもと築く、未来のしくみ

Plan
プラン・ジャパン

プラン・マンスリー・サポーター報告書

Autumn 2014

2013年7月 → 2014年6月

発行：公益財団法人 プラン・ジャパン

トーゴ「障がいのある子どもたちの支援体制作り」

実施地域●中部チャオジョ県、ビリッタ県、東モノ県 24 村
実施時間● 2011 年 8 月～ 2016 年 6 月
対象●障がいのある子ども約 2,000 人と地域住民、保健・教育・社会福祉分野の職員

村人たちがそれぞれにグループを結成し、障がいのある人に寄りそう気持ちを育む

プラン・ジャパン評議員　増田明美（スポーツジャーナリスト）

今回、視察に訪れたスポーツジャーナリストで、プラン・ジャパン評議員でもある増田明美さん。長距離走で、数々の日本記録・世界記録更新の実績を持つ一方で、日本障害者スポーツ協会評議員も務め、パラリンピックのさらなる発展にも尽力しています。プランでは、2010 年のラオスのプロジェクト視察に続いて、今回はトーゴを視察

村人が啓発活動を行い、障がい者の職業訓練を手助け

校舎の壁にはりだされた、障がい者への理解を呼びかけるポスターを見る子どもたち

ドコドコドンドコ、ドコドコドンドコ……。この太鼓のリズムは馴染みがないはずなのに、なぜか心が揺さぶられる。やはりアフリカは人類発祥の地で、遠い遠い私の先祖もここで生きていたのかもと思いながら歓迎の踊りに手拍子を取っていた。2014 年 7 月中旬、アフリカ中西部のトーゴを訪れた。過去には奴隷海岸と呼ばれたベニン湾に面し、国土は南北に細長い。国民一人あたりの所得は年間約 5 万円で西隣のガーナの三分の一という世界最貧国の一つだ。

パリ経由で海沿いの首都のロメへ。そこから北へ車で 6 時間、国のほぼ中央に位置するソコデという町に着いた。ここを拠点に周辺の村々を訪ねる。

午後、障がいのある子どもの暮らす家庭を訪問した。プラン・トーゴが行っている職業訓練を受け、美容師を目指している聾唖者のリシャラさん。青いブラウス姿でとてもオシャレな 17 歳。「先生との出会いで娘も生きる意欲を持つようになりました」と母親が話す姿が印象的だった。確かに赤ちゃんを抱っこしながら話す先生は立ち居振る舞いなど洗練されていて魅力的な女性である。リシャラさんに優しい眼差しをむける先生。リシャラさんが先生のようになりたいと、美容師としても、女性としても憧れているのが分かる。プランのスタッフだけではなく、村人が身近なところで支え合っていた。

2011 年にプランが建てた校舎の前の大きな木の下に村人たちが集まった。普段からここで、お父さんの会、お母さんの会などが開かれ、プランの指導を受けたボランティアが啓発活動を行ったり、村人同士で話し合ったりしているそうだ。この日参加した義足の青年は「もっと障がいのある子どもを助け出したい」と熱く語ってくれた。

校庭の大きな木の下に集まった「お母さんの会」のメンバー。この日は多くの村人が集まってくれた

障がい者を一人ぼっちにさせない。啓発活動が根づき始める

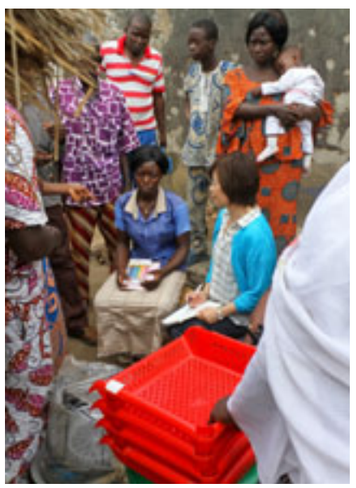
「ここパッソワデ村は山間部で農地が少なく、この近辺で一番貧しい村です」と現地のスタッフから説明を受けた。近い親戚同士の結婚が多く、母子保健も充実していないので障がいのある子どもが多いそうだ。

小学校の校庭の大きな木の下。日曜日だったその日は、村のボランティアが白い布に厚紙に書いた絵を貼りながら、障がいの種類や障がい者の職業訓練について、啓発活動を村の人々に行っていた。「障がいの種類にはどんなものがありますか？」。村人から多くの手が上がり、「目が見えない」「歩けない」など答えが出ると、その障がいのある人のイラストが描かれた紙を皆に見せながら白い布に貼っていく。「子どもを家に隠しているとダメです。障がいがあっても仕事ができます」と美容師や修理工などの職業訓練のイラストも説明。おばあちゃんに抱っこされて聞く子どもや大人たちの目も真剣そのもので、啓発活動の原点をみる思いがした。

この日も 2 軒の家庭を訪問。生まれつき脚に障がいがあった 5 歳の男の子、アラザさんは、ボランティアの指導で歩く練習を続け、今では歩けるようになっている。「将来はサッカー選手になりたい」と目を輝かせた。

5 歳の男の子、ランダンさんは聾唖者でお母さんは再婚して彼を残して去ってしまったという。今はおばあちゃんに育てられている。悲しみを宿した目で、ニコリともしないランダンさん。しかし私たちが席を立ち、5～6 人の友だちが周りにやってくると笑顔がこぼれた。普段から一緒に遊んでいるからこその自然な笑顔に少し安心した。

二つの村を訪ねて正直驚いた。日本でもまだ障がい者を支える環境や人々の意識は十分ではない。でもトーゴの貧しい村で、障がい者を家の中に閉じ込めていてはいけない、一人ぼっちにさせてはいけないと、地域の人々が子どもたちに寄り添いながら暮らしている。プランが地道に行ってきた活動が根づいている。



美容師を目指している聾唖者のリシャラさんと一緒に

障がいがあっても、社会に参加できることを表したイラスト

スリランカ「子どもの保護とケア及び地域社会への復帰支援」

実施期間● 2012 年 12 月～ 2015 年 12 月
実施地域●東部州バティカロア県
対象●紛争の影響を受けた子ども　約 2 万 6,000 人

紛争後の融和は、もっとも困難な事業。傷ついた子どもたちのケアから未来を築く

プラン・ジャパン理事　杉下恒夫（国際開発ジャーナリスト）

ユース・ボランティアの集会にて（杉下理事は右から３人目、佐藤事務局長は右から４人目）

若者が中心となって、紛争後の子どもたちをケア

プランのスリランカでのプロジェクトを視察するため、６月１日から約１週間、プラン・ジャパンの佐藤活朗事務局長とともに、スリランカを訪れた。

私がスリランカに足を踏み入れるのは、今回で４回目になる。過去３回の訪問時は紛争が続いており、経済は停滞、多発した自爆テロの恐怖が残り、国中に暗い雰囲気が漂っていた。最激戦地だった北部で見た爆撃で上部が吹っ飛んだビル、沿道の家々の壁に残る無数の銃痕が今も目に焼き付いている。内戦は 2009 年１月、政府軍が武装組織 LTTE を制圧して終焉した。４半世紀におよぶ戦いで、約10万人が犠牲となったとされる。

地域のユース・ボランティアから発表を聞く

今回は、戦火が消えてから初めての訪問。最大都市のコロンボは、建設ラッシュで華やかな雰囲気に包まれ、これが同じ町かと目を疑うほど変貌していた。

われわれは内戦で疲弊した地域に足をのばした。東部のバティカロア県は内戦時、LTTE の支配下にあり、経済・社会が極端に荒廃したうえ、2004 年のスマトラ島沖地震で津波被害も受けており、内戦と天災の傷跡がまだ各所に残っていた。だが、数年前に LTTE 支配地域を訪れた際に感じた人々の不安感や絶望感はあまりなく、復興を信じて前向きに生きているという印象だった。

視察した「子どもの保護とケア及び地域社会への復帰支援プログラム」は、同県の村落部で実施されており、非常に興味深かった。この地域は紛争や自然災害で親を亡くした子どもや、出稼ぎで保護者がいない子どもが多く、放置、虐待問題が深刻だ。プランは児童労働や早すぎる結婚への対処と、子どもを学校に通わせる活動をしていた。19 歳から 23 歳の若者が地域の子どものケアをするユース・ボランティア制度など、きめ細かい活動によって子どもが保護される成果が見えていた。住民が集まった青空集会所で若い女性が、内戦で多数の親族を亡くした事実を淡々と話したときは、東日本大震災の被災者の姿がダブり、思わず目頭が熱くなった。

今回のスリランカ訪問は、NGO の重い責務を再認識する旅でもあった。国際協力活動の中で、最も困難な作業は紛争後の Reconciliation（再融和）だとされる。一度戦火を交えた人たちの間に残る遺恨は、簡単に消えるものではない。再融和を導く仕事は、政治色がない NGO が最適だ。スリランカで見たプランの活動のように、住民の心の襞に届く活動は、NGO にしかできないものであり、われわれはもっと力をつけ、さらなる国際貢献が求められていることを痛感した。

世界で5～ 17 歳の2億 1,500 万人が労働に従事し、健全な発育や教育の機会を奪われています（※）。強制労働、債務労働、子ども兵士、人身売買、子ども買春・ポルノなど、その形態は悪質化しています。

※ ILO,2010

ネパール「働く子どもたち」

実施地域●中部および東部（ヘタウダ、ビラトゥナガール、イタハリ～ダラン間ハイウェイ周辺、カマラマイ）
実施期間●2009 年 7 月～ 2016 年 6 月
対象●子ども約 6,800 人

児童労働をなくし子どもたちに教育と経済的自立を

背景

ネパールでは児童労働が深刻な問題。多くの子どもが劣悪な環境で働いています。ほとんどが貧しい農家や少数民族の出身で、読み書きも十分にできません。こうした働く子どもたちを暴力や搾取から守り、教育、職業訓練、娯楽、貯蓄などの機会を提供し、法や政策の整備を政府に働きかけます。

美容師トレーニングを受ける女の子

今期の主な活動

●最悪の形態の児童労働から救出、保護された子ども（103 人）
●補習教育プログラムの実施（524 人）　●奨学金の支給（638 人）
●職業訓練プログラムの実施（72 人）　●ライフスキル教育の実施（758 人）
●「貯蓄奨励制度」利用（1,051 人）　●メディアキャンペーンなど

今期も不当な労働に従事させられている子どもたちを救出・保護し、精神面のリハビリを実施しました。正規学校への入学や復学を目指す子どもには補習教育プログラムを提供し、必要に応じて奨学金も支給。15 歳以上の子どもには職業訓練やライフスキル教育を実施し、経済的・精神的自立を支援しました。すでに洋服仕立店のオーナーになった女の子もいます。働きながら通学している子どもたちには、お金の管理に関する研修も実施。さらにメディアやイベント等を通じて子どもたち自身がメッセージを発信し、児童労働の根絶を訴えています。雇用者側にはオリエンテーションを行い、雇用の際、出生証明書などで子どもの年齢を確認するよう働きかけています。

プロジェクトの効果が現れ始め、活動を支援してくれるホテルなども出てきました。また児童労働の実態をタイムリーに把握できるようになり、その数も減少していることが確認されています。

Case Study　Sさん（14 歳の女の子）

住み込みの家事使用人から解放、学校に通い始めて優秀な生徒に！

Sさんは大家族の貧困家庭の女の子です。父親は彼女が3歳のときに亡くなり、母親が日雇いの農作業で生計を立ててきました。その後、育児の負担が大きくなった母親はある家庭と雇用契約を結び、当時6歳だったSさんを家事使用人として送り出します。契約では正規教育が受けられる学校に通えるはずでしたが、雇い主は約束を守りませんでした。彼女は毎日朝早くから夜遅くまで、家畜の世話や洗濯、掃除、食事の後片付けをさせられました。

ある日、プロジェクトスタッフがSさんと出会います。雇い主を何度も訪問し、彼女に補習教育プログラムを受けさせるよう説得。雇い主は通学を了承し、Sさんは優秀な成績を収めました。さらにプランは彼女を正規学校に入学させるべく、雇い主と再度粘り強く交渉。半日ではありましたが、通えることになりました。Sさんは一層努力し、初等教育最終年度の成績は何と2番でした。

さらに彼女の教育を継続させるため、小規模畜産業を始めることを家族に提案。ヤギのつがいを提供し、Sさんには奨学金を支給しました。Sさんは今、実家に戻って前期中学校に進学し、学校生活を楽しんでいます。Sさんの母親は次のように語っています。「娘を遠く離れた土地に家事使用人として送り出したのは間違いでした。今後暮らし向きがどうなろうと、娘を二度と家事使用人には出しません。プロジェクトによって目が覚めました」。

つがいのヤギとSさん母子

紛争や災害に巻き込まれる子どもたち

武力紛争下の国や地域に暮らす子どもは 10 億人以上（※）。命を落とし、親を失い、戦闘や強制労働に駆りだされています。また、近年の記録的な大雨や台風、干ばつなども、子どもたちの生活や教育に打撃を与えています。

※ UNICEF, 2009

「災害に強い学校」世界プログラム

実施期間● 2013 年 5 月～ 2015 年 6 月　実施地域●ミャンマー西部ラカイン州、ベトナム中部クアンビン省、ネパール中部ナラヤニ県、タイ（プラン・アジア地域統括事務所）
対象●実施地域の住民約 8,200 人（子ども 6,800 人、教師 225 人含む）

防災対策を世界規模にスケールアップ 子どもたちも防災計画作りに参加

背景

過去 10 年に世界で自然災害の影響を受けた人の約 90%、亡くなった人の約 80%がアジア地域の人々です。アセアン加盟国だけでも、小学校に通う年齢の子ども 1 億人以上が自然災害の影響を受けやすい地域に暮らしています。彼らは起きている時間の 50%以上を学校で過ごしていますが、学校における防災対策は遅れています。

学校の防災対策について話し合う子どもたち（ベトナム）

今期の主な活動

- 「アセアン・災害に強い学校」ガイドライン策定（プラン・アジア地域統括事務所）とガイドラインに基づいたトレーニング（700人）
- 学校の安全性評価（43 校）
- 災害に強い学校モデルの確立と校舎の修繕・再建（5 校）
- 防災に関する啓発イベント（9 回）

プランの国際本部は、「災害に強い学校」プログラムを世界規模で実施することを決定。これに伴い、プラン・ジャパンはアジアの支援国事務所として、2014 年 6 月より、毎年のように大雨による洪水や地震の影響を受けてきたネパールへの支援を開始しました。

今期、ミャンマーでは村落開発・災害管理委員会、学校災害管理委員会、PTA などが中心となって、30 校の安全性評価を実施。沿岸部 5 校の木造・レンガ製校舎を堅固な鉄筋コンクリート製に再建し、不足していたトイレや給水タンクを設置しました。ベトナムでは、対象 13 校で安全性評価を行い、サイクロンなどの暴風雨に耐性の高い校舎モデルを確立しました。

子どもたちは評価結果に基づいて、避難ルートや避難手順、防災備品の準備などの防災対策を自分たち自身で考えます。この学校防災対策は、学校啓発イベントなどを通じて、実施地域外の住民にも共有され、コミュニティの防災対策にも生かされました。

「災害に強い学校」世界プログラムは、国連国際防災戦略事務局（UNISDR）の「“100 万の安全な学校と病院”世界キャンペーン」に賛同して行われているプログラムです。プランは、1 人でも多くの子どもを災害から守るために防災対策を推進していきます。

Children's Voice | ナインさん、ティさん

子どもたち自身の手で防災計画を策定し、啓発を

「僕たち学校防災対策グループメンバー 5 人は、毎週末、校舎の修繕状況をチェックしています。工事の人から何か支援のリクエストがあったときに、校長先生や村長さんに伝えるのが僕たちの役目です。これまでは天井がなく、床がむき出しの教室で授業を受けていましたが、これからは安全な環境で学ぶことができます」（ナイン・リンさん / ミャンマーの対象校の児童）

「防災知識に関するクイズ大会はとても楽しかったです。このイベントで学んだ知識を家族や友人と共有したいです。実際に災害が来たときに、必ず役に立つはずです」（ホン・メンさん / ベトナムの対象校の生徒）

防災知識に関するクイズ大会にて（ベトナム）

ウガンダ「難民居住区に暮らす南スーダン難民支援」

実施地域●アジュマニ県
実施期間● 2014 年 6 月～ 2014 年 8 月
対象●難民居住区に暮らす南スーダン難民約 3 万 9,000 人

難民となった子どもたちが 安全に暮らせる環境づくりを支援

背景

2011 年に独立した南スーダン共和国は、2013 年 12 月に武力衝突が激化。約 130 万人が国内避難民、約 45 万人が周辺国で難民となっています（2014 年 9 月時点）。ウガンダは 12 万人以上の難民を受け入れましたが、新しく設置された難民居住区には、十分な給水設備や教育施設がありませんでした。

子どもにやさしいスペースで遊ぶ子どもたち

今期の主な活動

- 子どもにやさしいスペースの設置（4カ所）、学習教材・遊具等の支給および指導員の養成（40人）　●子ども保護委員会の設立支援および保護委員向け研修（84人）
- 井戸設置（2 基）および水管理委員会（30 人）、井戸技術者（18 人）への研修
- 世帯トイレと水浴び場の設置（シングルマザー、高齢者、孤児、障がい者などの 26 世帯）
- 生理用品の配布（2,800 人）

難民居住区内に「子どもにやさしいスペース」を設置。子どもたちはここで楽しい時間を過ごし、それが心のケアにもつながっています。幼稚園の機能も併せもち、勉強の機会も提供しています。難民のリーダーたち（長老、宗教リーダー、女性、若者）で構成される子ども保護委員会の設立も支援。3日間の研修と月1回の会合を通じて、保護委員の能力強化を行いました。保護委員には、子どもたちが虐待などに遭った場合に相談を受けたりするなどの役割が期待されています。

また子どもダイアログと呼ばれる研修会を開き、難民居住区での生活や悩みなどを子どもたちだけで話し合う機会も提供。さらに、子どもたちの悩みや問題を他の NGO や国際機関と共有し、継続的に対応できる体制づくりも行っています。本プロジェクトはジャパン・プラットフォームとの協働で実施されました。

Case Study | クリスティンさん

7人の子どもを養育する母親の負担を軽減

クリスティンさんは 2014 年 1 月初旬、戦渦の南スーダンから自分の子ども 4 人と、両親を失った子ども 3 人を抱えて、ウガンダ・アジュマニ県の難民居住区へ逃れてきました。3 人の子どもたちは武力衝突が発生した 2013 年 12 月、自宅で武装勢力に突然襲われました。子どもたちは逃げることができましたが、両親は銃撃に遭い、その場で死亡。クリスティンさんは両親と友人だったこともあり、3 人の子どもたちを引き取ったのです。

難民居住区では提供された木材やビニールシートなどを使って、難民自身が仮設住居やトイレ、水浴び場などを設置しなければなりません。クリスティンさんの夫は今も南スーダンに戦闘員として残っているため、彼女はシングルマザー状態。7 人もの子どもの世話をしながら生活環境を整えていくのはとても大変で、「3 人の子どもたちの養育を続けることは難しい」と相談してきました。

そこでプランは、クリスティンさんの家にトイレと水浴び場を設置。仮設住居を設置するうえでの負担を軽減することで、彼女が 7 人の子どもを養育できるように側面から支援しました。学齢期の子どもたちは皆、難民居住区から近隣の学校に通っています。紛争下や難民キャンプであっても、大人の庇護のもと、安全で愛情ある環境の中で生活することが子どもたちの健全な成長には必要です。それを可能にした今回の支援は、とても意義のあるものだったといえます。

7人の子どもを養育しているクリスティンさん

世界中で約 9,500 万人と推定される障がいのある子どもたち（0 ～ 14 歳）（※）。基本的な医療や社会サービスが不足しているために適切な治療やケアを受けられず、周囲の無理解から差別や虐待にあいやすいことも問題です。

※ WHO, 2011

インド「障がいのある子どもたち」

実施地域●デリー市北部の 19 地域
実施期間● 2012 年 7 月～ 2016 年 6 月
対象●障がいのある子ども約 600 人と、地域住民 22 万 5,000 人

地域の既存のリソースを最大限に活用し、障がいのある子どもの生活を改善

背景

インドの首都デリーでは、約 24 万人の子どもたちに障がいがあり、その多くは適切な治療を受けることができていません。本プロジェクトでは、新たにデリー北部の 19 地域での支援を開始。8 カ所の障がい児センターを中心に、リハビリテーションや治療、教育の機会を提供しています。

意識啓発ワークショップの様子

今期の主な活動

●コミュニティ情報センターの設立（4カ所）　●リハビリテーション・治療（185 人）
●フォローアップセッションの実施（1,920 回）
●保護者・地域住民の能力強化（保護者 126 人、コミュニティボランティア 20 人）
●政府・関係機関との連携強化（778 人が公共の福祉サービスを享受）
●意識啓発ワークショップ（学校関係者 116 人、保護者 130 人、障がいある子ども 50 人）
●障がいのある子どもへの教育支援（就学者 18 人、就学準備受講者 39 人）

本プロジェクトのポイントのひとつは、既存のリソースを最大限に活用すること。政府や公共機関が障がいのある子どもへの支援サービスを用意していても、人々がその存在を知らない、あるいは利用方法がわからなければ意味がありません。そこでコミュニティに設置した障がい児センターや情報センターで公共サービスの情報を提供し、利用手続きをサポート。その結果、多くの子どもがさまざまな公共サービスを享受できるようになりました。

障がいのある子どもを地域の学校に入学させる試みも続いています。受入れ先の学校や保護者、障がいのある子ども自身に意識啓発ワークショップを実施し、体制を整備しました。今後はすでに就学している子どもへのフォローアップも積極的に実施していきます。

Case Study　ノリンさん（仮名・障がいのある7歳の女の子）

公共の福祉サービスで生活が改善！

ノリンさん（仮名）は、生まれつき聴覚障がいのある女の子です。父親、母親、2 人の兄弟の 5 人家族。父親は屋台でお茶を販売し、毎月 50 ドルほどの収入を得ています。決して楽な暮らしではありません。彼女はこれまで、支援を受けたことはありませんでした。

そんなとき、ノリンさんの父親は、プロジェクトが実施する障がいのある子どもの保護者向け意識啓発ミーティングに参加しました。ミーティング後、スタッフの強い勧めもあり、父親はノリンさんをコミュニティの“障がい児センター”へ連れて行きました。

センターでは、ノリンさんの障がいの状況を踏まえ、さまざまな公共サービスの紹介と利用手続きが行われました。それ以降、ノリンさんは障がい者向けの年金サービスや鉄道無料乗車サービスを受けられるようになったほか、聴覚障がいのある子どもを受け入れている特別学校に入学することができました。学校で習った手話で、友だちができたと嬉しそうに話すノリンさん。プロジェクトを通じてノリンさんの生活は大きく改善したのです。

ノリンさんのケースはまだほんのひと握りにすぎません。依然として、適切な支援が受けられていない障がいのある子どもたちがたくさんいます。今後もプロジェクトでは、一人ひとりの障がいのある子どもに適したサービスを提供できるよう、政府や公共機関とともに支援を続けていきます。

プロジェクトを通じて学校にも通い始めたノリンさん

グアテマラ「障がいのある子どもたちの支援体制作り」

実施地域●東部イサバル県、モラーレス市、ロス・アマテス市の計 30 コミュニティ
実施期間● 2013 年1月～ 2015 年1月　対象●障がいのある子ども約 300 人と保護者、地域住民、行政リーダー、保健・教育・社会福祉分野の職員

障がいのある子どもへの理解を促進し、地域で支え合う

背景

グアテマラでは、約 700 万人の子どもに障がいがありますが、偏見や差別が根強く、彼らの多くが地域社会から隔離され、適切なケアを受けられずにいます。本プロジェクトでは、地域住民の能力強化や意識啓発などを通じ、地域全体で支援体制を構築していきます。

障がいのある子とない子が一緒にトレーニング中

今期の主な活動

●障がいのある子どもの特定（283 人）　●トレーニングの実施：保護者（332 人）、障がいのある子ども（35 人）および障がいのない子ども（2,268 人）、コミュニティリーダー（284 人）、地元団体（21 人）　●障がいのある子どもへの教育支援（12 人）
●障がいのある子どもを支援するコミュニティ委員会の設立（30 委員会）
●ラジオを通じた意識啓発活動　●「障がい児センター」の設置準備（9 カ所）

今期は地域全体で障がいのある子どもに対する理解を促進し、支援を強化するため、さまざまなトレーニングを実施しました。そのうちのひとつが、障がいのない子どもが障がいのある子どもを支えることを目指すトレーニング。子どもたちは、グループワークやゲームを通じて理解を深め、自分たちで何ができるかを話し合いました。今期は 12 人の障がいのある子どもが地域の学校に入学しましたが、周囲の理解もあってどの子どもも学校に馴染むことができています。

トレーニングを通じて、障がいのある子どもをもつ保護者の意識にも変化が見られます。これまではわが子のことで孤独に悩んできた保護者たち。トレーニングを通じて同じ立場の保護者と出会い、支え合えるようなりました。障がいのあるわが子に対して、前向きに考えられるようになったとの声も届いています。

Case Study　リサンドロさん（5歳）、イスマエルさん（10 歳）

障がいがあっても社会に参加！ 学校にも通えるようになりました

リサンドロさん、イスマエルさん兄弟には、生まれつき視覚障がいがあります。2 人の母親であるマリアさんは、首都にある医療機関で適切な治療を受けられることは知っていましたが、貧しさのため、2 人を医療機関に連れていくことができませんでした。

そんな中、マリアさんのコミュニティで本プロジェクトがスタート。彼女は前向きにトレーニングに参加しました。トレーニングを通じて障がいについて正しい知識を得ることができたのはもちろんですが、障がいのある娘をもつオフェリアさんと知り合えたことが大きな成果でした。同じような境遇にあるオフェリアさんの存在は、マリアさんにとって大きな支えとなっています。

トレーニング後、マリアさんとオフェリアさんは積極的に子どもたちを外に連れ出し、コミュニティの活動に参加させています。障がいのある子どもであっても、コミュニティの一員として社会に参加する権利があると理解したのです。子どもたちは外で活発に遊ぶようになり、友だちもできました。笑顔も増えたようです。

リサンドロさんとイスマエルさんは今、専門医療機関のアドバイスを受け、杖の使い方を習得中です。これは学校に通い始めるための準備でもあります。マリアさんは、息子たちが学校で学べることに感謝しながら、彼らが将来自立できることを願っています。

障がいのある子どもの保護者へのトレーニング

虐待される子どもたち

虐待の実態を把握することは困難ですが、毎年５億人から15億人の子どもが経験していると推定されています（※）。身体・心理的虐待、育児放棄、強制労働や性的搾取を目的とした人身売買など、その内容もさまざまです。

※ WHO, 2011

カメルーン「弱い立場にある子どもの支援と保護」

実施地域●北西部バメンダ活動地域
実施期間● 2011年1月～2014年12月
対象●エイズ孤児や虐待を受けた子どもなど約2,600人

暴力や虐待で傷ついた子どもたちが、一日も早く、新しい一歩を踏み出せるように

背景

カメルーン北西州では、心の状態が不安定な子どもが多いことが調査で明らかになりました。これは性的虐待、家庭内暴力、貧困とともに、この地域がカメルーン国内でもっとも HIV 感染率が高く（9%）、多くの子どもが親や親戚を失っていることとも関係があります。

啓発セッションを行うプラン職員

今期の主な活動

- 子どもの権利保護に関する啓発キャンペーン（のべ1万1,500人以上参加）
- 子どもの権利保護に関するリフレッシュ研修（約3,000人）
- カウンセリングと心のケア（404人）　● 職業訓練（69人）
- 教材・学用品支給および教育費支援（715人）、医療サービスと栄養支援（47人）、生活用品支援（544人）

暴力や虐待に遭った子どもたちの心の傷を癒し、新しい一歩を踏み出せるようにするためには、様々なパートナーの協働が欠かせません。プロジェクトでは、専門家による適切なカウンセリングと心のケアを行い、子どもたちが希望をもって生きていく意欲を高めています。

まず、地域の子どもが、傷ついた子ども宅を訪れて交流することで、帰属意識や安心感を与えました。保護者に対しては啓発キャンペーンを行い、子どもとの対話をもち、子どもに寛容に接するよう訴えました。また、虐待の被害に遇った子どもたち自身がスポーツ、寸劇、歌などを通した啓発活動を企画・実施することで、彼らの自尊心の回復と情緒の安定につなげることができました。

研修を通じて、暴力や虐待の問題への理解を深めた地域の大人たちは、次年度も新たな課題に取り組んでいきます。

Case Study　虐待を受けそうになった娘をもつ母親（45歳）

子どもの声に耳を傾けることが、虐待のリスクを減らす

カメルーンでは長年、子どもへの体罰が習慣的に行われてきました。大人は「子どもは親の命令に黙って従うべき」と考え、言うことを聞かない子どもへの体罰を、しつけの一環として正当化しています。ある調査によると、保護者から体罰を受けた経験があるカメルーンの2～14歳の子どもは75%で、その26%が深刻なものでした。本プロジェクトの実施地域である北西州は、国内で2番目に深刻な体罰のケースが多い州（36%）です。

こうした慣習は、子どもをさらに深刻な危険にさらす可能性があります。ある女性（45歳）の話です。「以前、親戚から食糧を分けてもらうため、娘をお使いに出していました。ところがある日、どんなに頼んでも娘は行こうとしません。彼女は理由を言いかけましたが、私は取り合わず、ただ叱り、その晩は食事を与えませんでした。2日後、プランの心のケアトレーニングに夫と参加しました。そこで、親子の対話が不足していると、子どもが暴力や虐待に巻き込まれる場合があることを学びました。家に戻って親戚の家に行きたくない理由を娘にただすと、以前、そこに住む叔父にレイプされそうになり、『誰かに話したら殺す』と脅されたそうです。私たちが娘の話に耳を傾けたことで、娘はレイプを免れることができたのです」。

性暴力の防止を訴える子どもたち

プロジェクト開始以来、親子の対話の重要性が認識されるようになり、地域全体で体罰のケースが減ってきました。これもプロジェクトの大きな成果です。

もっと知りたい！ プラン・マンスリー・サポーター

いつもあたたかいお気持ちとご寄付をありがとうございます。
今号では、全国に約1万6,000人いらっしゃるマンスリー・サポーターの方々の横顔や声をご紹介します。

イラスト／西島尚美

マンスリー・サポーターになった決め手は？
- 実施プロジェクト分野に関心があったから　83%
- 負担にならない金額だったから　82%

関心のあるプロジェクト分野は？
- ストリート・チルドレンと働く子どもたち　46%
- 紛争や災害に巻き込まれる子どもたち　26%

- 3人に1人は、10年以上の支援者
- 6人に1人はチャイルドと交流するスポンサーでもある

ご支援のきっかけは？ マンスリー・サポーターの皆さんからの声

- ▶ 45年前に世界各地を旅行した際、東南アジア、特にインドでは大きなショックを受け、子どもの支援が必要と感じたので。（60代女性）
- ▶ 必要とされているプロジェクトに適宜寄付されるところが気に入りました。（20代女性）
- ▶ これまで不自由なく十分な教育を受けさせてもらえたことに感謝。自分で得た収入の一部を社会に還元したい。（40代女性）
- ▶ 長年スポンサーシップの支援をしていましたが、交流相手のチャイルドにあまり手紙を出せないことが心の重荷になっており、支援方法を変えました。（50代女性）

毎月ランチ1回分（1,000円）のご寄付で、途上国の子どもたちを支えることができます

引き続きあたたかいお気持ちとお力添えをよろしくお願いいたします。またお知り合いにご関心のある方がいらっしゃいましたら、ぜひご紹介ください！

- ご寄付の増額（変更）はいつでも承っております。
- ボーナス月や記念日のある月だけ増額するなど、増額月の設定も可能です。

（※プラン・ジャパンへのご寄付は、確定申告をすることで所得税の還付が受けられます）

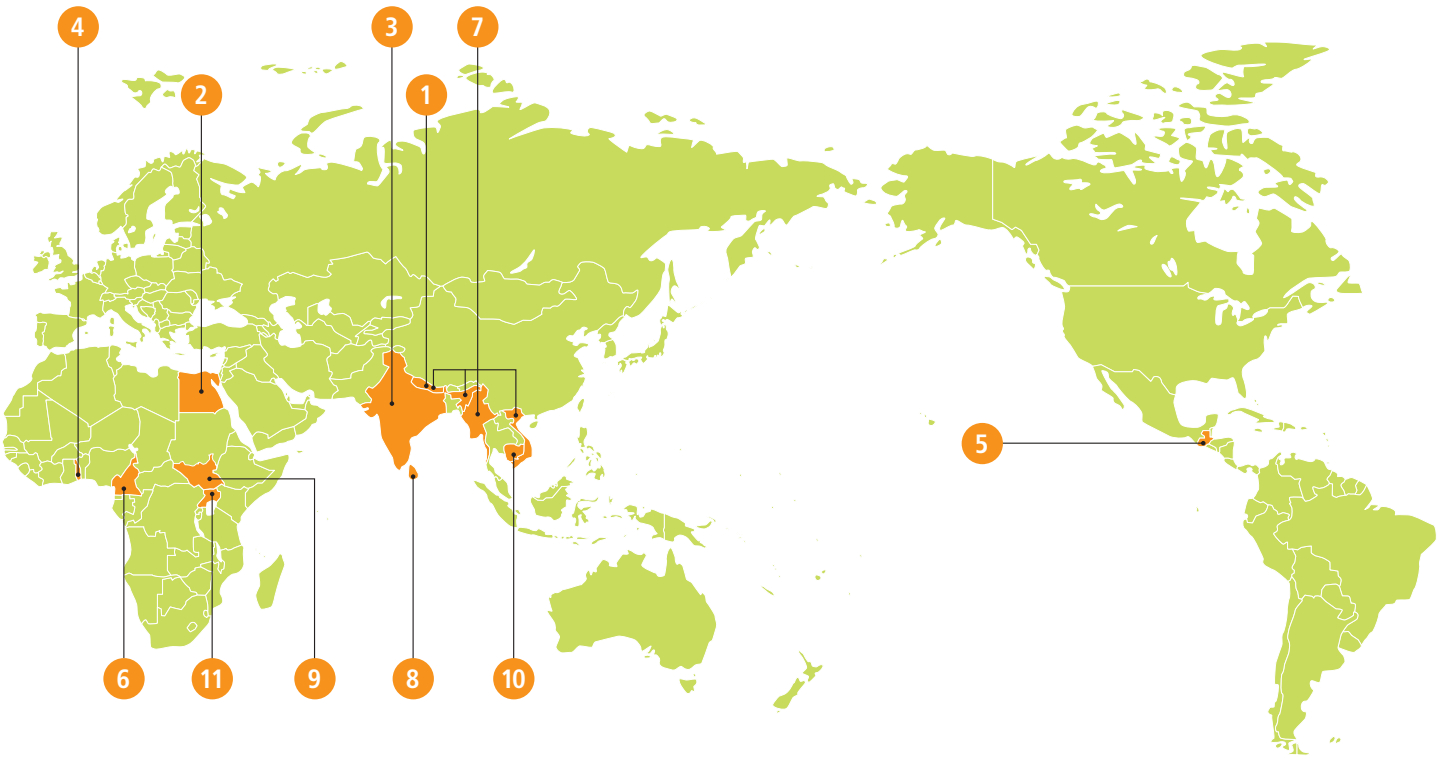
プラン・マンスリー・サポーター担当者より（内山職員）

プラン・マンスリー・サポーターのプロジェクトのほとんどは3年以上と長期で、中には6年以上のものもあります。『問題の把握』⇒『関係者との問題共有』⇒『問題解決のための計画策定・実施』⇒『プロジェクト評価』⇒『新たな計画策定・実施』というプロセスを繰り返すことで、関係者の意識と行動の変化を徐々に促し、子どもたちを取り巻く社会問題の解決を目指していますが、このプロセスには多くの時間を要します。プラン・マンスリー・サポーターの生命線は、活動の継続と拡大、そして皆さまからの継続的なご支援です。子どもたちが暴力、虐待や搾取、自然災害などの脅威に怯えることなく、安心して暮らせる社会のしくみを作るため、今後とも長期的なご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

お問合せ：プラン・ジャパン　支援者サポート部
TEL：03-5481-6100　FAX：03-5481-6200　E-MAIL：service@plan-japan.org
件名：「プラン・マンスリー・サポーター　寄付額変更／紹介資料　希望」　※SP（スポンサー）番号をおもちの方はお知らせください

2014年度
プラン・マンスリー・サポーター収支

（2013年7月～2014年6月）
マンスリー・サポーター年度末数：15,517人



（単位：円）

収入	寄付金（収入合計）			378,667,422 ※
	カテゴリー	国	プロジェクト名	
支出	ストリート・チルドレンと働く子どもたち	1 ネパール	働く子どもたち	20,041,920
		2 エジプト	ストリート・チルドレン	16,729,992
	障がいのある子どもたち	3 インド	障がいのある子どもたち	11,751,840
		4 トーゴ	障がいのある子どもたちの支援体制づくり	37,952,144
		5 グアテマラ	障がいのある子どもたちの支援体制づくり	18,317,348
	HIVとエイズに苦しむ子どもたち	3 インド	子どもと女性を中心としたHIV予防とケア	28,522,800
		6 カメルーン	子どもと女性を中心としたHIV予防とケア	17,173,512
	紛争や災害に巻き込まれる子どもたち	7 アジア4カ国［ミャンマー/ベトナム/ネパール/タイ］	「災害に強い学校」世界プログラム	6,164,640
		8 スリランカ	子どもの保護とケア及び地域社会への復帰支援	15,726,960
		9 南スーダン	若者への就職・起業支援	22,800,341
		10 カンボジア	学校給食を通した子どもの栄養改善	25,350,480
		11 ウガンダ	難民居住区に暮らす南スーダン難民支援	561,600
	虐待される子どもたち	8 スリランカ	家庭・学校・地域での暴力防止	27,138,249
		6 カメルーン	弱い立場にある子どもの支援と保護	17,189,280
	日本国内活動費用			103,219,316
	支出合計			368,640,422

当期収支差額	10,027,000
前期繰越収支差額	47,367,000
次期繰越収支差額	57,394,000

※ 収入には、2012年7月～2013年6月の「プラン一般プロジェクト」無特定寄付からの補填（11,189,410円）も含む。

ご質問やご意見などございましたら、下記担当までご連絡ください。

公益財団法人プラン・ジャパン
〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル10F
TEL 03-5481-6100 FAX 03-5481-6200 www.plan-japan.org

Plan プラン・ジャパン